

看護実践研究センター報告書

令和2年度

目 次

I	はじめに	1
II	令和2年度事業報告	2
	1. なごや看護生涯学習セミナー	2
	【看護研究セミナー】	
	(1) 看護研究いろはの「い」	
	(2) 看護研究いろはの「ろ」	
	(3) 看護研究いろはの「は」	
	(4) 質問紙調査の設計、データクリーニング、データ入力のきほん	
	【看護実践セミナー】	
	(1) 家族支援における対話 ～オープンダイアログをやってみよう～	
	(2) 今からでも間に合う、呼吸・循環・輸液の考え方	
	(3) 急変させないためのアセスメント能力を高めよう（ベーシック）	
	2. なごや看護生涯学習公開講演会	12
	3. 地域連携セミナー	15
	4. 看護研究サポート	16
	5. 昭和生涯学習センター共催講座	18
III	今後の課題	20

名古屋市立大学大学院看護学研究科
名古屋市立大学病院看護部

I はじめに

令和2年は年初めより新型コロナウイルス感染症（以下、Covid-19）拡大の影響により、社会全体、とりわけ医療現場には多大な影響がおよぶ年となり、看護実践研究センター（以下、本センター）の企画立案や活動も大きな影響を受けることとなりました。なごや看護生涯学習公開講演会と地域連携セミナーは延期となり、延期後開催した際も感染予防の観点から遠隔で講演を聴講できるような工夫を要しました。他のセミナーも人数制限など感染対策を行いながらの開催でした。また、医療職の方々は Covid-19 対応で疲弊し余裕がなくなるような状況で、なごや看護生涯学習セミナーの参加者は例年になく落ち込みましたが、一方で看護研究サポートを希望する看護職者は継続的に存在し、例年通りの研究サポート活動を行うことができました。以下に、特殊な一年となった今年度の活動を総括し、課題を述べていきたいと思えます。

II 令和2年度事業報告

1. なごや看護生涯学習セミナー

担当：渡邊実香、松本千佳子、山吹美貴

「なごや看護生涯学習セミナー」は、愛知県内の保健医療職者を対象に、より専門性を高め地域住民へのサービス寄与につなげることを目的とした地域貢献事業である。本年度は看護研究セミナー4件、看護実践セミナー3件を企画したが、看護研究いろはの「ろ」(10/16)と、質問紙調査の設計、データクリーニング、データ入力のみほん(10/10)の2件のセミナーは申込者がなく中止した。最終的に看護研究セミナー2件、看護実践セミナー3件の開催となった。すべてのセミナーが、Covid-19の感染対策を取りながら対面での開催であった。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
4月	セミナー実施の承認・検討
5月	テーマおよびセミナー担当者募集開始
6月	テーマ申込み状況の把握 全テーマの開催日程、場所決定、教室予約
7月	セミナー当日の役割分担、アンケートの検討 チラシ配布先、配布枚数、印刷枚数の決定 参加申込方法（メール申込、FAX申込）の検討 チラシ、受講カード、アンケートの決定 参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表の検討 チラシ印刷発注
8月	チラシ発送（病院、名古屋市保健センター、老人保健施設及び精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計140箇所） 参加者募集開始
9月 ～12月	看護実践研究センターホームページで告知開始 受講生に受講カードの送付 セミナー申込み締切（各セミナーの日程により申込み締切を延長） 事務に領収書の依頼 各セミナー実施 実施前：受講者数の決定、受講者リスト作成、参加申込状況の報告、講師へ連絡、セミナー当日の委員の業務内容概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護学部ホームページへ開催報告掲載

	<p>【看護研究セミナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護研究いろはの「い」 (10/7) ・看護研究いろはの「ろ」 (10/16) ・看護研究いろはの「は」 (11/13) ・質問紙調査の設計、データクリーニング、データ入力のきほん (10/10) <p>【看護実践セミナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族支援における対話～オープンダイアログをやってみよう～ (10/3) ・今からでも間に合う、呼吸・循環・輸液の考え方 第1回 (10/15) 第2回 (10/22) 第3回 (10/29) ・急変させないためのアセスメント能力を高めよう(ベーシック) (11/22)
--	--

2) 事業の実施状況

【看護研究セミナー】

(1) 看護研究いろはの「い」

講師：脇本寛子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日時：令和2年10月7日（水）9時～16時

場所：名古屋市立大学看護学部棟 303 演習室

募集人数：10名

参加者：3名

参加費：6,000円



〈内 容〉

講義は、10項目（①はじめに、②看護研究とは、③看護研究のプロセス、④研究テーマ・研究課題の設定、⑤研究疑問、⑥研究論文の構成要素、⑦文献検索と文献検討、⑧研究デザイン、⑨倫理的配慮、⑩研究計画書の構成要素）の構成とした。午前（9時～12時）は①～⑥、午後（13時～16時）は⑦～⑩の内容とした。

受講生のニーズを把握するため、冒頭で、受講生に受講動機と特に学びたい内容について一人ずつ発言する機会を設けた。今年度は、全般的に丁寧に説明して欲しい、研究計画書について詳しく知りたいとの要望があり、受講生のニーズに合うように内容を調整した。⑤研究疑問の項目において、受講生が日常の実践における疑問を文章化し、研究疑問として表現することができるよう、個人ワークの時間を設けた。受講生に守秘義務の遵守を確認した上で、一人ひとりの疑問を全体で共有し、日常の実践における疑問が研究疑問ひいては研究目的に昇華できるよう助言をした。さらに、昨年度の受講生の反応から文献検索について実際に実施してみたかったとの意見があったことから、⑦文献検索においては、受講生が関心のあるキーワードを用いて文献検索を実際に医学中央雑誌（Web版）で実施した。どのように文献検索を行うのか、文献検索の結果からキーワードをどのように設定するのかなど、受講生のニーズに合わせて説明した。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

1日6時間の集中講義であったが、受講生は終始集中して受講されていた。受講生のニーズに合うように内容を調整したこと、受講生一人ひとりの研究疑問に関してフィードバックを行ったことから、セミナーの理解度は良かったと考えられた。

〈アンケート結果〉

参加者3名の全員からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機で多かったものは、「新しい知識を得る」2名（66.7%）、「興味・関心があった」2名（66.7%）であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」者は3名（100%）であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・実際に論文を使いながらでわかりやすかった。

(2) 看護研究いろはの「ろ」

講 師：宮内義明（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日 時：令和2年10月16日（金）9時00分～16時00分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 401 情報処理教室

募集人数：9名

参加者：0名につき中止

参加費：6,000円

(3) 看護研究いろはの「は」

講 師：小田嶋裕輝（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日 時：令和 2 年 11 月 13 日（金）9 時 00 分～13 時 00 分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 303 演習室

募集人数：10 名

参加者：5 名

参加費：4,000 円



〈内 容〉

講義は、大きく 4 項目（①質的研究とは何か、②質的研究のプロセスをイメージする、③クリティークの視点で論文を分析してみる、④質的研究の具体を知って“感覚”をつかむ）により構成された。

具体的に、①では、質的研究とは何か、質的研究の特徴、質的研究の手続き、質的研究と量的研究の相違点について講義した。②では、質的研究を用いた論文を例に取り上げ、研究動機を研究序論としてどう発展させるかを、先行研究分析の方法と合わせて説明した。③では、クリティークの概念の説明を行い、実際にクリティークチェックリストを用いて②で取り上げた論文について詳細な批判的検討を行った。その上で、適切なクリティークを行えることは洗練された研究計画書の作成にもつながることを説明した。④では、質的研究を実践するために必要なデータ収集方法の種類やデータ分析の方法について説明した。また、自身の先行研究を取り上げながら、カテゴリー化の実際を体験し、コード化する際のコツを説明した。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

5 名の受講者であったため、適宜質問を受けつつ運営をした。質問内容は、倫理審査を受けることを視野に入れた研究計画書の立案方法に関する質問や、分析方法の具体に関する質問であった。受講生はとても話に集中している様子が見られた。よって、受講者の理解度に応じた内容となったと考える。

〈アンケート結果〉

参加者5名のうち、5名からアンケートの回答があった。(回収率100.0%)。セミナー参加動機が多かったものは「その他(質的研究に取り組むため)」3名(60.0%)で、次いで「自分の看護のレベル・アップ」「新しい知識を得る」「興味・関心があった」であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」は5名(100%)であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・説明で利用されていた言葉や説明に使われた例えなどが非常にわかりやすかった。
- ・象徴的で難しい内容でしたが、実際やってみたことでわかりやすく学びました。

(4) 質問紙調査の設計、データクリーニング、データ入力のきほん

講師：金子典代(名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授)

日時：令和2年10月10日(土)9時30分～12時30分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 410 情報処理室

募集人数：10名

参加者：0名につき中止

参加費：3,000円

【看護実践セミナー】

(1) 家族支援における対話～オープンダイアログをやってみよう～

講師：門間晶子(名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授)

加藤まり(名古屋市立大学大学院看護学研究科・博士後期課程)

日時：令和2年10月3日(土)13時～16時30分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 402 講義室

募集人数：20名

参加者：4名

参加費：4,000円



〈内 容〉

講話と演習を織り交ぜながら、以下の4つの柱で進行した。

1) オープンダイアログ (OD) とは

フィンランドから導入されたODの発祥・実際、7つの原則、12の基本要素、日本での広がりなどについて、フィンランドでの研修ツアーの様子を含めて話題提供した。

2) 「聴く」「応答する」ための工夫：演習

(1) 「聴く」と「話す」を分ける体験

(2) 対話の可能性を広げるリフレクティング

ODの基本である「聴く」「応答する」を同時に一人の人が行うことは難しい。人や時間を分けて「聴く」と「応答する」の体験、および対話の可能性を広げるためにODでは必須として用いられる「リフレクティング」を体験した。

3) ODの全体像イメージ

実際にODを家族支援の場面に用いるとするとどういったイメージになるのか、対話のはじめ方、進め方、参加者と共有すべき約束事、留意点、ファシリテーターの役割などについて具体的に説明した。

4) 保健師活動における対話の工夫

- ・ 保健師が家族支援の場で対話続けるために工夫している点について、研究データを紹介した。
- ・ 家族と水平な関係を築き、課題に対して協働するための「早期ダイアログ(early dialogue)」の考え方について紹介した。

5) 振り返り 対話の可能性

対話の可能性として、ODが保健活動場面だけでなく、人材育成や事例検討等にも応用可能であることを伝えた。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

一人一人の参加目的を尋ねて開始した。少ない参加者の中でも、オープンダイアログの予備知識はさまざまであった。今回は参加者が全員保健師であることが把握できたため、保健師活動にフォーカスを当て、参加者とやりとりでしながら進めることができた。チームでODを行うハードルが高いイメージではなく、自身の実践の選択肢が広がるような、例えば「早期ダイアログ」の考え方や支援者の姿勢について説明できた点は、実践に結びつきやすいと感じてもらったことにつながったかもしれない。参加者の中には支援者同士の事例検討を通して実践できる可能性があると言及し、さらに理解を深めるために学習会への参加意欲を持った方もいた。

時間的には、演習にたっぷり時間をとったということもあるが、最後にもう少しふりかえりの時間が欲しかったので、3時間半ではやや厳しい。

〈アンケート結果〉

参加者4名の全員からアンケートの回答があった(回収率100%)。セミナー参加動機で最も多かったのは「新しい知識を得る」3名(75.0%)であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」者は4名(100%)であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・支援者が“助けて”と言える事例検討を行っていききたい。
- ・初回面接時、家族で来所した場合に活用できるかもと思った。
- ・理論の勉強も必要だと思った。

(2) 今からでも間に合う、呼吸・循環・輸液の考え方

講 師：薊 隆文（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

日 時：第1回 令和2年10月15日（木）18時30分～20時30分

第2回 令和2年10月22日（木）18時30分～20時30分

第3回 令和2年10月29日（木）18時30分～20時30分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 410 講義室

募集人数：30名

参加者：10月15日（木）3名、10月22日（木）3名、10月29日（木）3名

参加費：6,000円



〈内 容〉

普段使い慣れている指標を使って、病棟・手術室での状態の悪化したとき、急変時に今何が起こっていて、何が必要かが理解できるようになることを目標とした。

第1回：呼吸偏

解剖生理を簡潔に説明したのち、よく使われている数値 SpO_2 や PaO_2 と基本的な呼吸数との関係を論じた。実は、 SpO_2 や PaO_2 などより呼吸数の評価が大事である。

第2回：循環偏

血圧がどうして循環の指標になるのか？血圧はなぜ末梢の方が高いのか？を理解することで、血圧測定から本来の循環の管理を解説した。血圧測定時にひと手間加えることで、より正確な循環評価が行える。

第3回：輸液偏

体液の基本を解説したのち、輸液の目的を最大量・最少量・速度・質の指標から解説した。浸透圧とは濃度であること、輸液剤で浸透圧を変えることでの意味を説明した。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

少人数（3名）であったため、理解度を確認しながら進めたこともあり、表情からは満足感がうかがえた。

ワークショップ形式も考えたが、3回ではとても無理だとあきらめた。逆に人数が多いとそれもできないが。

〈アンケート結果〉

最終日参加者3名の全員からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機は「自分の看護のレベル・アップ」「新しい知識を得る」「興味・関心があった」であった。また、セミナーの内容は「どちらかといえばわかりやすかった」者は2名（66.7%）で、「どちらかといえば難しかった」者は1名（33.3%）であった。

(3) 急変させないためのアセスメント能力を高めよう（ベーシック）

講 師：加藤紀子、稲尾景子

（名古屋市立大学病院・救急看護認定看護師、集中ケア認定看護師）

日 時：令和2年11月22日（日）9時00分～16時00分

場 所：名古屋市立大学病院 臨床シミュレーションセンター

募集人数：20名

参加者：3名

参加費：6,000円



〈内 容〉

このセミナーは、受講生が患者の急変前徴候に気づき、適切な処置を行い、医師などに報告することで、患者が防ぎえた心停止・防ぎ得た後遺障害に至らないように対応できる能力を身につけることを目的としている。患者急変対応コースfor Nurseガイドブックによれば、「急変とは、予測を超えた状態の変化をいい、その程度は観察者の予測範囲によって異なる。一般にはその変化の方向性は、病態（症状）の悪化を意味し、何らかの

医療処置を必要とする場合を表現している」と定義され、心停止の6～8時間前には何らかの徴候が出ていると言われている。私たち看護師がその徴候を見逃さないためには、患者の変化に気づき、医師などに迅速かつ適切に報告する能力が求められる。

急変前徴候に気付けるかは観察者である看護師の予測範囲によって異なるため、看護師は常日頃から急変に備えて患者を観察、評価する能力を向上させることが必要である。このセミナーでは看護師が系統的に観察できるよう迅速評価、一次評価について学習する内容となっている。迅速評価とは、「最初に出会った数秒間で、呼吸、循環、意識・外見を五感のみを使って、アセスメントする」ことで、患者に「死に結び付く可能性のある危険な徴候」があるか判断することである。アセスメントの結果、心肺停止状態と判断した場合はBLSを実施し、心肺停止状態ではないが、危険な徴候がある場合は、応援要請をしながら、詳しく患者の状態を把握するために一次評価を実施する。一次評価では、簡単な器具（血圧計、生体情報モニタ、聴診器、ペンライト、体温計）を用いて視診、触診、聴診で、命を支える「A：気道」「B：呼吸」「C：循環」「D：意識」「E：外表・体温」に問題ないか素早く観察を行う。そして、患者の状態を観察しながら、患者に何が起きているのかアセスメントを行い、SBARを用いた報告を医師などに行う。このような内容を今後臨床場面で実践できるようなセミナーの構成とした。

セミナーの構成としては、受講生同士が活発にディスカッションできるようアイスブレイクを行った後、講義・机上シミュレーション・実働シミュレーションの3部構成で段階を経て知識を習得できるようにした。また、さらに今回は、Covid-19流行中のコース開催であったため、講師・受講生含めた健康観察とともに、コース開催中の換気や器具の消毒、手指消毒など感染対策にも注意を払いながら安全なコース開催に努めた。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

繰り返しシミュレーションすることで、活発なディスカッションができ、実践でのアセスメント能力の向上が期待できると考える。少人数での開催となり、じっくり演習を行える環境となった。



〈アンケート結果〉

参加者 3 名の全員からアンケートの回答があった（回収率 100%）。セミナー参加動機で最も多かったものは「自分の看護のレベル・アップ」の 3 名（100.0%）であった。セミナーの内容は、全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・少人数だったこともあり、気になったことがすぐ確認できてありがたかったです。
- ・急変対応も大事だが、急変させない、心停止よりもっと前の段階で気づき、対応できる術を学べたので、日々何気なくみている患者のことをもっと注意深く、アンテナはってみたい。
- ・迅速評価、一次評価が必要な場面はたくさんあるので、今回、くり返し演習をしたことで、今までよりスムーズに観察や報告ができるようになったと思います。

3) 課題

今年度は、Covid-19 の感染対策に向けた開催方法の検討から始まった。セミナー内容ごとに、最適な開催方法は異なるため、講師陣の意向を確認するとともに、WEB 開催とした場合の参加費徴収方法の検討を行った。最終的にセミナーごとの募集人員を減らし、感染対策をとり、すべてのセミナーを対面方式で開催したが、WEB 開催となった場合の参加費用徴収方法に関し、会計管理方法の課題が残った。

企画された計 6 件のセミナーに対し、2 件で申し込みがなかったこと、開催されたセミナーも全般的に参加者が少なかったことは、医療従事者を対象としたセミナーのため Covid-19 の影響の他、参加費の値上げ（2000/3000 円から 6000 円）も関係していることが考えられた。一部の参加者より参加費が高いとの声が寄せられたが、多くは適正であるとの回答を得ていた。また、セミナー内容に関する評価では、少人数でのセミナー運営に対して、丁寧な講習、反復演習を可能とするなど、高い評価をえられ、参加者のニーズを満たすことにつながったと思われる。人数制限を行いながらの対面セミナーを実施する場合、今年度の参加費で計画することは妥当な価格設定かと考えられた。また、本セミナーはすべて、医療従事者を対象としており、外部の講習参加への制限等の理由より、限定的な参加者数にとどまったものと思われる。Covid-19 の今後の動向を踏まえると、WEB 開催との併用によりセミナー参加者の増加が期待されるため、参加費用徴収方法の課題を整理し、今後は、WEB 開催の検討を進め、セミナー発展を目指したい。

なお、看護実践セミナー「患者急変対応」では、ベーシック編のみの開催としたが、従来開催されていたアドバンス編の開催に関しは、講師陣より問い合わせもあった。本セミナーの場合、対面講習が予想されるため、Covid-19 の感染状況による参加者制限の可能性も含め、次年度の開催企画の検討を行うこととする。

2. なごや看護生涯学習公開講演会

担当：宮内義明、原沢優子、松本千佳子、山吹美貴

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に対する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。また、本年度はなごや看護学会との共催として、下記の通り準備を進めた。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
5月	開催時期について検討
6月	開催時期について検討
7月	開催方法について検討
9月	チラシ（案）の作成 講師決定、開催日時決定、会場予約 テーマと講師の決定 チラシ送付先の検討 印刷枚数の検討 アンケート内容、チラシ原稿の確認 広報なごや12月号掲載依頼
10月	印刷発注（1,300部） 企画広報課へプレスリリース依頼 封筒宛名印刷
11月	チラシ納品、チラシ発送 募集開始 参加申し込み状況、準備状況の確認 プレスリリース（名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブ） 看護実践研究センターホームページ・全学部ホームページ告知開始
12月	講師への最終確認書類の発送
1月	配布資料到着
2月	実施報告

2) 事業の実施内容

テーマ：ワーク・エンゲイジメントで仕事にやりがい！職場も生き生き！

講師：島津明人氏（慶応義塾大学総合政策学部・教授）

日時：令和3年1月14日（木）18:00～19:30

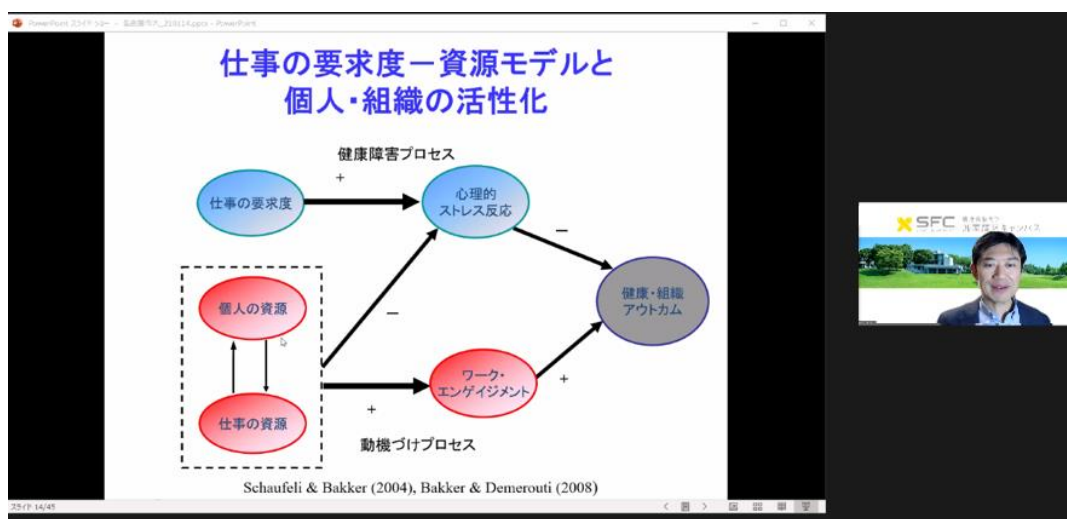
場 所：Zoom による遠隔ライブセミナー形式

参加費：無料

参加者：100 名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

医療従事者が健康でかつ生き生きと働くことは、良質のケアを提供する上で重要な課題です。本講演では、近年、職場のメンタルヘルスの新しい鍵概念として注目されている「ワーク・エンゲイジメント」について、その基本となる考え方から紐解き、研究動向を踏まえながら、「ワーク・エンゲイジメント」を組み入れた「仕事の要求度－資源モデル」のご紹介いただきました。そして「ワーク・エンゲイジメント」に基づく職場での「よりよい支援につなげるための 7 つのポイント」をご説明いただきました。Zoom による遠隔ライブセミナー形式でのご講演でしたが、わかりやすい説明が参加者にも大変好評で、盛況に終わりました。



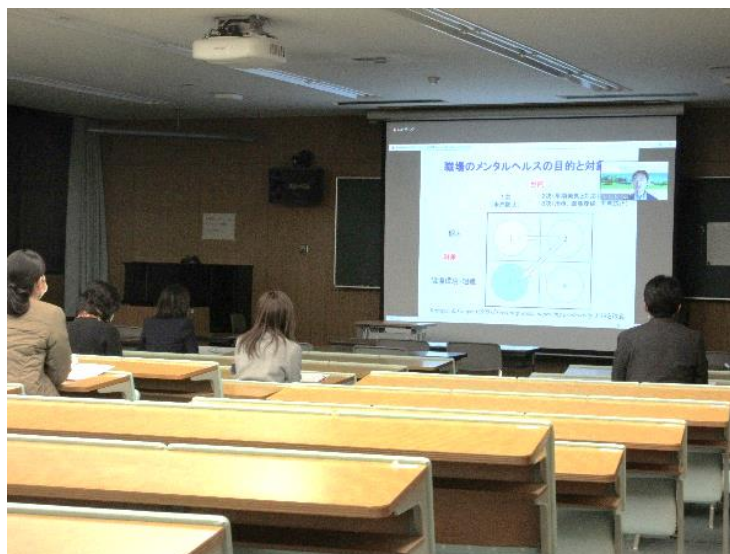
3) 参加者アンケート結果

参加者推定 100 名のうち、50 名からアンケートの回答があった(回収率 50.0%)。参加者のほとんどは看護師 26 名 (52.0%) であったが、看護系大学教員、理学療法士、助産師、医師と本講演のテーマを反映した多職種が参加していた。講演内容について、「分かりやすかった」もしくは「どちらかといえば分かりやすかった」と答えた人は 48 名 (96.0%) とわかりやすさについて高い評価が得られた。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 先行研究に基づいた知見に、具体的な説明、例えを提示いただき、大変わかりやすかった。
- ・ リーダーが生き生きすれば、スタッフも感じ取り生き生きする。リーダーのエンゲイジメントが部下に伝わるということが分かった。
- ・ 現在スタッフを育てる立場におり、コロナの影響が自分を含め、個々の精神面に影響しているように思います。今日の学びは、今の悩みに合っているものでした。

- ・講演会の中で学んだ視点で、自分自身の考えを見直し、今の職場での関わりに生かせよう。
- ・自分自身はスタッフであるが、同僚やこれから来る新人スタッフに、これらのことを念頭に入れて、関わりたいと思った。
- ・自分の働き方には活かせると思います。職場で活かせるには上司へもこのような研修が必要だと思った。



4) 課題

昨年度、新型コロナウイルスの感染によって中止（期日未定延期）となった公開講演会と同じ企画を今年度改めて実施した。今年度もコロナ禍は続いているが、昨年度と異なり Zoom による Web 開催が可能となっていたため、今年度は Zoom による遠隔ライブミーティング形式での開催とした。講師をお願いした慶応義塾大学総合政策学部 島津明人 教授が Zoom での講義や講演に慣れておられたこともあり、極めてスムーズで大変分かりやすい講演会となった。

今年度は遠隔での講演会としたため、参加費を無料とし、配付資料も原則無しとした。但し、今回より共催開催となった「なごや看護学会」の会員に対しては PDF 配付資料をメール添付にて配布し、資料ファイルが手元にある状態で聴講できるようにした。

次年度への課題としては、今年度は参加費を無料としたが、昨年度から値上げ予定であった参加費（500 円→1,000 円）を来年度始めて適用することになるので、参加人数への影響が大きくなることを防ぐため、企画やプロモーションに例年以上の注力が必要と思われる。

3. 地域連携セミナー

担当：小田嶋裕輝、明石恵子

「地域連携セミナー」は、市民の皆様と保健医療福祉関連職種の方々が連携して取り組むべき社会的な問題を取り上げている。さまざまな立場の人々が一緒に考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待している事業である。しかし、令和2年2月中旬より、新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の感染拡大が憂慮される状況となり、参加者の安全を考慮して中止（期日未定延期）とした。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
10月	テーマと講師の選定、講師との交渉
11月	講師・テーマ等の決定
12月	チラシ(案)・申込方法・配布先の検討
1月	広報なごや4月号への掲載依頼
3月	企画広報課へのプレスリリース依頼 チラシ原稿最終確認、印刷依頼（1,100部）
4月	看護実践研究センターホームページで募集告知 チラシ発送 参加者募集開始（FAX、インターネット） 参加申込者への参加の可否連絡
5月	延期決定のため申込者へ連絡
6月	開催時期について検討

2) 事業の実施予定内容

テーマ：在宅医療の賢い活用法—終末期を自宅で過ごすためには—

講師：森亮太氏（杉浦医院 院長）

日時：令和2年7月11日（土）13時00分～15時00分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 308 講義室

参加費：500円

3) 課題

前記の通り、開催予定日が新型コロナウイルスの感染による肺炎（Covid-19）の流行時期と重なった為、中止（期日未定延期）とした。事前受付数は17名と順調な申し込み人数の増加状況であったことから、次年度開催の方向となった場合は本企画を推進していくことが必要である。なお、今回の講師には来年度、同テーマで公開講演会を企画・開催したい旨を伝え、了承を得ている。ただし、新型コロナウイルス感染の状況を踏まえ、受付人数は100名ではなく、半数程度にするなどの検討が必要である。

4. 看護研究サポート

担当：脇本寛子、松本千佳子、山吹美貴

「看護研究サポート」は、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学研究科の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。

1) 事業実施の経緯

【令和元度看護研究サポート】前期 新規 5 件、継続 1 件
後期 新規 2 件 計 8 件(新規 7)

時期	内容
4 月	研究の募集開始（ホームページへの掲載）
5 月	研究の募集締め切り（5/18 締め切り） サポート教員の募集開始 サポート教員の募集締め切り 研究チームとサポート教員のマッチング結果をメール配信
6 月	研究サポート後期募集について提案
7 月	サポート中の受講者・担当教員からの要望への対応を提案
8 月	サポート状況の中間確認の実施
9 月	中間確認の結果報告 後期研究サポートの募集（10/8 締め切り）
10 月	研究チームとサポート教員のマッチング 研究テーマと担当教員の報告
11 月	研究サポート開始（11 月～令和 2 年 9 月末）
2 月	後期研究サポートの中間確認の結果報告
3 月	看護研究サポート実績報告書の回収とまとめ（3/1 締め切り）

2) 事業の実施状況

今年度の 4 月案内の応募件数は新規 5 件（スタンダード 5 件）、継続 1 件（ショート 1 件）であった。年間サポート予定件数を満たしていないため 10 月の募集を行い新規 2 件（スタンダード）の申し込みがあった。今年度はすべて名古屋市立大学病院所属者の申し込みであった。

サポート教員は、新規テーマは専門性に沿った適任者に受諾され、継続テーマは前任者が引き続き担当した。今年度は、助教にも依頼し、十分に役割を果たすことができた。若手研究者にも研究指導の機会として選出することができた。

サポート状況は、2件の対応が必要であった。1件は前年度後期申込の事例で、サポート期間延長を検討した。もう1件は今年度後期申込の事例で、中間報告の内容において、担当教員、受講生へ対応した。中間報告は、双方の課題の早期発見、早期対応に役立った。

教員経費の使用方法について、あらたに文献複写費の申請方法の説明を追加した。

サポート教員の研究にかかる経費は、すべて執行された。

昨年度と今年度と連続して、名古屋市立大学病院以外のサポート申し込みが0件であり、受講者のニーズを把握する必要がある課題としてあり、看護研究サポートに関する質問紙調査を実施した。愛知県内207施設を対象とし、看護研究サポートに関する質問紙調査を実施した。結果の概要は、以下の通りである。

- ・ 従来、看護研究サポートの案内を出していない施設にもアンケートを配布した結果、名古屋市外でもニーズが高いと思われるため、送付先を追加しても良いと思われる。
- ・ なごや看護生涯学習セミナー「いろは」の「い」より前の段階の講演内容を加えても良いのではないかと意見が出た。
- ・ 出前授業のような出張研修もニーズが高いと思われ、今後、事業展開できるか検討することとなった。

3) 課 題

来年度より、看護研究サポート事業は、「なごや看護学会」に引き継がれる。学会から非学会員の看護研究サポートを担当する予定である。学会との共同が始まるので、円滑に軌道に乗るように進めていく。質問紙調査結果は、「なごや看護学会」に提供し、内容、送付先などを検討して頂く。

質問紙調査結果から、出前授業のような出張研修もニーズが高いと思われ、今後、事業展開できるか検討する。

5. 昭和生涯学習センター共催講座

担当：原沢優子

「昭和生涯学習センター共催講座」は、昭和区との共催で行っている事業であり、本年度で 6 回目である。市民は大学という普段入ることの出来ない場で、専門的で先進的なことを低額で学ぶことができ、大学としては、学生以外にも学びを提供するという地域貢献ができる事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
5 月	昭和生涯学習センター担当者との講座開催方法の検討 (実務は名古屋市教育委員会 生涯学習課が担当) テーマと講師の選定、講師との交渉開始 (メール・電話で検討)
6 月	テーマと講師の選定 知の広場掲載依頼
7 月	テーマ、講師、開催日時決定 広報、参加者募集開始 (昭和生涯学習センター担当者)
9 月	講師への依頼書発送 (昭和生涯学習センター担当者)
12 月	参加者抽選 (昭和生涯学習センター担当) 後の人数把握
1 月	会場の臨場確認 (昭和生涯学習センター担当者と共に使用教室等) 講座の運営開始 (1/29, 2/12, 3/5, 3/12) 第 1 回公開講座アンケート集計の確認・講師フィードバック確認
3 月	第 2-4 回アンケート結果確認・講師フィードバック確認 次年度以降の運営方法案提示(3/16 会議) 看護実践研究センターホームページに開催報告掲載 全学ホームページに開催報告掲載

2) 事業の実施内容

令和 2 年度後期昭和生涯学習センター事業として、「今だからこそ、あらためて感染症を知る！」をテーマとする全 4 回の講座を実施した。第 1 回は公開講座であり、参加者は 39 名であった。2 回目以後は有料 (受講料：900 円) で、応募者 48 名から抽選で 30 名の受講者が選定された。

開催日時	内容	講師
1 月 29 日 14:00-16:00	正しく怖がる！ 感染症との上手な付き合い方	中村敦 (名古屋市立大学大学院 医学研究科・教授)
2 月 12 日 14:00-16:00	感染の基本知識 日本や世界の感染 症対策はどう行われている？	脇本寛子 (名古屋市立大学大学院 看護学研究科・准教授)

3月5日 14:00-16:00	ひとり一人の感染予防を大切に！ 日ごろの生活習慣を再確認しよう	吉川寛美（名古屋市立大学大学院 看護学研究科・助教）
3月12日 14:00-16:00	かぜに抗菌薬？知っていますか 『薬』の正しい使い方	和知野千春（名古屋市立大学病院・ 感染制御室／薬剤部）

3) 参加者アンケート結果

主催者である昭和生涯学習センターが実施した参加者アンケートの主な結果は、以下の通りであった。

第1回公開講座については、参加者39名にアンケート用紙を配布し36名から回答があった（回収率92.3%）。講座の内容について「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」と答えた人が30名（83.3%）と高評価であった。参加者の感想の一部を掲載する。

- ・感染症予防について、わかりやすい講義でありがたかった。
- ・ワクチンが注射である理由がわかった。噴霧型のワクチンの活用が楽しみだ。
- ・とても興味深く、感染症・ワクチンの話もとても参考になった。

第2～4回目までの連続講座については、最終日の参加者25名にアンケート用紙を配布し、全員から回答があった（回収率100%）。講座の内容、講師の指導、講座全体の満足度について全員が「たいへんよかった」（17名、68%）もしくは「まあまあよかった」（8名、32%）と回答し高評価であった。参加者の感想の一部を掲載する。

- ・実践的な話も多く、とても参考になった（手洗い・マスクなど）
- ・現場で働く方々のお話が聞けてよかった。知らなかったことがたくさんあった。
- ・また参加したい。家族や職場の人にも伝えて、気をつけていきたい。
- ・名市大の講座を毎回、受けている。楽しみにしています。



4) 課題

昭和生涯学習センターの担当者が変更して運営体制の確認が必要になり整備した。会場が市大の場合、「市大の講座」という印象になりやすいため今後の共催について検討する。新型コロナウイルス感染予防対策における県内の開催基準を満たすために会場設営は例年より配慮を要し、本センター側からの対応人数を増員して対応した。次年度も同様の配慮が必要と考えられ、センター側の体制も再検討が必要である。

Ⅲ 今後の課題

本年度は、Covid-19 拡大の影響により、本センターの企画立案や活動は延期や修正をかさねながらの活動となりました。今年度は、社会全体がめったに経験しない過酷な年度となりました。一方で、今年は東日本大震災から 10 年目を迎えています。このようなことを考えると、私たちは数年に一度は過酷な状況に遭遇するのだと改めて感じました。地球温暖化や気候変動の影響もあり今後も災害は続くと思われませんが、私たちはその時々状況に応じて、柔軟に活動を修正変更していくしなやかさが必要であり、そういう意味では今年度は貴重な経験になったと感じております。

今後は、Covid-19 がいったん落ち着いたとしても、講演やセミナー開催時は感染予防対策や聴講の工夫などの必要なことを考えながらの開催となります。また、忙しく疲労も強い看護職者の方々が参加しやすい工夫も必要です。しかし、忙しい中でも学びたい、スキルアップしたいという意欲を持たれている看護職者の方々が多くおられることも実感しました。そのような方々のスキルアップに貢献できるように今後も課題を整理し新しい企画を考え提供していきたいと思っています。

本センターは、名古屋市立大学大学院看護学研究科が行う社会貢献事業の企画・運営の役割を担っています。いままでも昭和生涯学習センターとの共催での講演会開催を行ってきましたが、今年度は新たに、なごや看護学会との共催で講演会開催を行いました。

名古屋市を中心とした地域貢献が使命となっている中、各団体と共催することで、より多くの方に周知でき、さまざまにニーズに応じていけることと思います。さらに来年度からは、看護研究サポート事業をなごや看護学会と協働して行うこととなりました。学会には名古屋市を中心として多くの臨床関係者や大学関係者が所属しています。研究サポート事業を通して、ニーズとシーズ、大学と病院連携などが促進されることを期待しています。

令和2年度看護実践研究センター運営委員会

センター長 香月富士日 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
運営委員 明石 恵子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
小田嶋裕輝 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
原沢 優子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
松本千佳子 (名古屋市立大学病院看護部)
宮内 義明 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
山吹 美貴 (名古屋市立大学病院看護部)
脇本 寛子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
渡邊 実香 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
事務職員 小林真理子

名古屋市立大学看護実践研究センター

〒467-8601

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地

TEL&FAX 052(853)8042

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/>